

修士論文要旨

研究テーマ： ブラインド体験を用いた統合失調症に対する対人関係
および認知機能に焦点を当てたプログラムの効果について

学籍番号 2270049

氏 名 早川 佑治

研究指導教員 坂井 一也

概 要

【背景・目的】

内閣府の令和 5 年時点での調査では、精神障害者数は約 614.8 万人と精神障害を有する者が一番多い¹⁾。精神病床における入院患者数は令和 2 年時点で約 28.8 万人である¹⁾。その内統合失調症を有する患者は、14.3 万人と他の精神疾患を有する患者よりも一番多く、退院患者の平均在院日数を傷病分類別によると、統合失調症者は 570.6 日と一番長く在院されている²⁾。統合失調症者にとって、長期入院は退院を阻害要因の一つとされており³⁾、早期に介入し退院を促進していく必要がある。

統合失調症者の転帰には、社会機能の障害が主な影響の一つである⁴⁾。Maria らは、社会機能をカテゴリー分けしており、その中に対人関係および認知機能が含まれている⁵⁾。従って、統合失調症者の退院を促進するためには、コミュニケーション力および認知機能を改善させ、社会機能を向上させることが重要である。

統合失調症者に対するコミュニケーション、また認知機能に焦点を当てたりハビリテーションは、様々実施されており、それぞれ有用性も報告されている。一方で、臨床現場に導入のしづらさを感じる。そのため、臨床現場に導入しやすいコミュニケーションおよび認知機能の改善プログラムを確立させる必要があると考えた。

ブラインドサッカーは、視覚情報に頼らず「音」と「声」によるコミュニケーションが重要となり、ブラインドサッカーの簡単な練習がコミュニケーション力、信頼関係構築の向上に寄与すると言われている⁶⁾。また、ブラインドウォークを行った研究において、コミュニケーション力、ライフスキル獲得に効果的との報告がある⁷⁾。健常者を対象としたブラインド体験によるコミュニケーション力、社会機能向上の研究報告は散見されるが、統合失調症者に対する研究報告はなく、効果は不明である。そこで、本研究の目的は、統合失調症者に対し、ブラインド体験を用いた対人関係および認知機能に焦点を当てたプログラムの効果検証をすることとし、加えて、プログラムの満足度を調査することとした。

【対象・方法】

本研究の対象者は、入院もしくはデイケアに通所している 20 歳以上 64 歳以下および Global Assessment of Functioning (以下、GAF) 40 点以上の者、International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems (ICD-10) において統合失調症と診断された者とした。なお、歩行障害を有する者、知的障害を有する者、認知症を有する者（軽度認知障害を有する者も含む）、3 カ月間（計 24 回のプログラム）参加不可能な者は、対象から除外した。サンプルサイズは、Assessment of Communication and Interaction Skills (以下、ACIS) の先行研究⁸⁾により効果量 0.71、検定力 0.8、有意水準 0.05 とし、本研究の目標対象者数は各群 33 名、計 66 名とした。

本研究では、ランダム比較試験を用いた。介入群は、3 カ月間通常 OT に加えて、本

研究プログラムを実施してもらった。対照群は、同期間通常 OT のみを実施してもらい、2 群共にプログラム実施前と実施後（3 カ月後）に評価を実施した。

本研究で実施するプログラムを「ブラインド体験を伴うコミュニケーションスキルプログラム」とし（Communication Skills Training program with Blind experience）CST-B とした。CST-B とは、視覚を遮断する（ブラインド体験）ことによって、より言語コミュニケーション能力を必要とする状況を体験することを通して、コミュニケーション力・認知機能改善および人との繋がり（信頼関係）を目的とするプログラムである。CST-B の設定として、ブラインド体験を基本とし、週に 2 回計 24 回実施し、1 回を 60 分（オリエンテーション 10 分、実施 40 分、フィードバック 10 分）とした。オリエンテーションでは、プログラムの目的・ルールの確認をし、瞑想をした。また、フィードバックでは、プログラムの感想、満足度を記載してもらうこととした。プログラムは、統合失調症者の認知行動特徴を考慮し、またコミュニケーション能力を活性化していけるよう、机上プログラム、軽運動プログラム、応用プログラムの 3 セッションに分け実施し、また、各セッションの間（8 回目、16 回目、24 回目）に言語セッション（振り返り）を行った。効果判定では、コミュニケーション評価、認知機能評価、社会機能評価、心理・社会的側面評価、精神症状評価等を実施した。

統計解析は、介入群と対照群のベースラインを比較するために、基本属性のうち性別については χ^2 検定を用いた。それ以外の基本属性、各評価尺度の初期評価時の得点については、Mann-Whitney の U 検定を用いて群間比較を行った。また、プログラム効果の検討は、各群介入前後での得点の変化量を算出後、Mann-whitney の U 検定を用いて、群間比較を行った。統計処理ソフトは SPSS version 24.0 を用い、有意水準は 5% とした。

【結果】

最終的な対象者は、24 名（介入群 12 名、対照群 12 名）であった。認知機能の一部（ワーキングメモリー）、社会機能の一部（日常生活）で改善が認められたが、コミュニケーション、心理・社会的側面、精神症状では改善が認められなかった。また、CST-B に対する満足度調査では、約 8 割が満足、楽しかったと回答された。

【考察】

今回 CST-B プログラムによる介入を行ったところ認知機能の一部（ワーキングメモリー）、社会機能の一部（日常生活）に改善が認められた。ワーキングメモリーは、情報を円滑に処理し保持をする働きの基盤となる記憶機能である。CST-B では、ブラインド体験を基本とする為、課題を遂行する際に、受け手は送り手の発言等を記憶し遂行する必要があった。そのためワーキングメモリーの改善する要因となった可能性がある。また、社会機能の改善については、CST-B で困難だと感じたこと（他者と関わる上で）など日常生活に関連付けて毎回フィードバックし、言語セッションでも同様にディスカッションを重ねたことが動機づけの強化の要因となり、改善につながったのではないかと考えている。

【文献】

- 1) 内閣府：令和 5 年版障害者白書。
(https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r05hakusho/zenbun/siryo_01.html) 2024. 2. 11.
- 2) 厚生労働省：退院患者の平均在院日数等。
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/03.pdf>) 2024. 2. 11.
- 3) Gooch C, Leff J. Factors affecting the success of community placement, The TAPS project 26. Psychol Med 26(3):511-520, 1996. 4) T. R. Insel. Assessing the economic costs of serious mental illness. Am. J. Psychiatry 165(6):663-665, 2008. 5) Maria Long, Jacki L. Stansfeld. et al. A systematic review of social functioning Outcome measures in schizophrenia with a focus on suitability for intervention research. schizophrenia research 241:275-291, 2022.
- 6) 横尾智治. ブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流. 筑波大学附属駒場論集 50:152-160, 2010. 7) 東海林裕子他. 大学体育授業がライフスキルの獲得に与える影響. KEIUSFCJOURNAL 12(2):89-108, 2012. 8) 木村夏美, 小林法一. 整形外科疾患により回復期リハビリテーション病棟に入院した認知機能の低下を伴う高齢者に対する色カルタを用いた集団活動の効果. 日保学誌 22(4):190-197, 2020.